

# 原発対策委員会新聞

社 党 福 島 県  
連 合 原 発 対 策  
委 員 会

発 行 責 任 者  
小 川 右 善

## 県連合・伊達総支部で抗議

### 伊達市長低線量被ばくを軽視



#### 原発対策委・役員会開く

十月二十五日、県連は、伊達総支部と共に、伊達市役所を訪れ、伊達市長代行の鳴原副市長、長澤総務部長に対して抗議文を手渡し、伊達市長発言内容の撤回と、市民に対して謝罪を求めた。

よる内部被ばく検査について「八十歳以上はやらなくていい」と述べ、「検査は、安心料、お守りのようなもの」と説明した。また徐染は、「年五ミリシーベルト以内であれば安全」とも述べ、低線量被ばくの健康への影響を軽視し、まるで八十歳以上は、「枯れ木に水はいらない」かのように記載されていた。

鳴原副市長は「市長の真意が伝わらず、残念。新聞社に抗議した。」と述べ、IEBAなど、公的機関の基準を参考にしていると説明した。

報道され真意が伝わらないとすれば、抗議し、市民に説明すること。

ホールボディカウスターの検査については、その必要性について議論があるところだ。その理由としてβ線を出す放射性物質が計れないこと。ほとんどの人が検出限界値以下であること。などを理由に安心させる機器であると揶揄する人もある。

民主党とも関わりの深い「振津かつみ」医師に聞くと、「必要がないとは思われない。検出限界値はその機器によつて違う。チェルノブイリでも効果的に使われてきた。セシウム以外の放射能各種の検査に役立つ。原発に働く労働者にも使われてきた」と話す。

内部被ばくを軽視し、徐染則や一般人の公衆被ばく線量一ミリシーベルトも否定する言動を許してはいけない。民主党は今後とも公人の言動をチェックし厳しく対処する事として

## ふりふりー

今日の情勢の特徴に現職首長が敗北する傾向が続いている。原発事故以降の姿勢に批判が集中し、新人に期待する向きが強いからだ。遅々



として進まぬ事態に、強力なメッセージを発するリーダーを求めている。

しかし、ややもすると今日の現象は、進まぬ閉塞感の下、分断・軋轢・対立する身近な対象をバツとした。

当面する取り組み  
十二月一〜二日  
民主党全国連合・  
脱原発・脱プルトニ  
ウム全国連絡協議会  
合同研修会  
十二月七日  
第3回県連合原発  
対策会議  
脱原発講師団会議

二十七、党原発対策委員会を、県連合で開催した。

役員会は、対策委員長欠員に伴う委員長補充と民主党・原水禁運動に深く関わり都度知見をいただいている「振津かつみ」医師の位置づけを機会に、この間の脱原発闘争の経過と、今日の情勢の特徴、そして課題をフリーに討論した。

討論では、伊達市長発言の逸脱問題、ホールボディカウスターの是非、県民健康調査問題、関連死甲狀腺ガン問題、汚染水、労働者被ばく、

健康手帳問題など、運動論についても、対策委員会の位置づけや継続した運動など、多岐に渡る意見が出された。

新対策委員長に内定している県連合顧問の古川正浩さんは、「諸課題の討論を対策委員会で行い、意見として党全体に反映、運動にすることが大切、運動の成果を確認、共有化して次ぎのステップに繋げていく。」と早速、対策委員会委員長としての意欲を示した。

なお、正式には、県連常任幹事会で後日承認を受けること

